

ホームページ http://www.geocities.jp/tohoku_univ_wv_ob/

メールアドレスを変更された方は利根川さんに連絡して下さい：GWT00287@biglobe.ne.jp

2009年ワングル43年卒同期会 乗鞍高原

7期（昭和43年卒） 真尾 征雄

2008年6月那須で同期会をやった時に、「次回は北アの雄姿を見に信州でやろう。幹事は地元の藤森」と飲んだ勢いで決まった。それから藤森幹事の悩みが始まった。メールでやりとりをするも、仲間からの要求は様々。「アルペンルートを通して富山に抜きたい」、「畳平から大パノラマを見たい」、「記憶に残るような写真を撮りたい」、「3000m級の山を眺めながらゴルフをしたい」「年金暮らしなので安くしろ」、「折角行ってガスでは困る」等々……

ワングル創部50周年記念祝賀会で6期生と話していた所、「乗鞍高原に文科省の保養施設「あづみ館」があり、15名以上集まれば団体扱いで安くしてくれる」との情報を掴んだ。入梅前の6月6日（土）に「あづみ館」集合と決め、参加者集め、様々なオプション計画、車の確保、宿の手配と藤森幹事は多忙を極めた。

2009年6月6日（土）菊谷・上田・原・石川・村山・国岡・金子・山口の8名は松本CCでゴルフを楽しんだ後「あづみ館」へ。手戸・真尾の2名は乗鞍高原や飛騨高山で写真撮影後「あづみ館」へ。大山・大釜・大木・高橋勝也の4名は松本市内観光後「あづみ館」へ。

7期生15名が集まり18:30から宴会が始まった。乾杯に先立ち、今年3月に亡くなられた斎藤洋三さんへの黙祷。同期23名で、今まで鬼籍に入った者がいないのが自慢であっただけに、寂しいと思うとともに、ついに欠けはじめてしまったかの思いがあった。

料理は岩魚の刺身や山菜尽くしと採れたての食材ばかり、特に山菜の揚げたての天ぷらは美味しく、皆大喜びであった。宴たけなわのころ、6期生の野村彰夫ご夫妻が駆けつけてくれた。信州大学創立60周年記念式典の祝賀会を途中で退席して来られたとのこと、感謝！感謝！である。卒業以来はじめて野村ご夫妻と再会した人もいて、話題は学生時代のこと、合宿でのこと等思い出話に時の経つのを忘れていた。「来年の同期会は上田俊朗幹事による北海道」と決まった所で宴会はお開きとなった。2次会は持ち寄った酒やつまみで遅くまで続いていた。

翌6月7日（日）雲が切れて快晴になる。野村ご夫妻と別れて上高地へ。大正池から河童橋まで梓川に沿って新緑の中を歩く。途中ウェストン祭をやっていた。残雪が残る穂高連峰がくっきり見えたが、「また登りたい」と言う声は上がらなかった。松本駅で来年の再会を誓って解散。美ヶ原に撮影に向かうグループ、大町温泉に泊まってアルペンルート経由富山に抜けるグループ、東京へ帰って明日からの仕事に励むグループとそれぞれ散って行った。

野村彰夫ご夫妻再会楽しかったです。大変ありがとうございました。藤森英和幹事、同期の様々な注文に応じてくれて大変ご苦労様でした。



TUWV 7期同期会 2009/6/6 「あづみ館」

TUWV卒業40周年OB山行第11弾

「山行」と言うにはちょっと気恥ずかしい松島と桑沼巡り

8期（昭和44年卒）渡辺 幸英

参加者 8期 根岸夫妻、前田夫妻、宮下(中里)母娘、小笠原、濱、守護、渡辺

9期 伊藤夫妻、片野夫妻、富川夫妻、桃谷夫妻、川田、原田

同期OB山行に参加するのは1998年の安達太良山以来のこと。OB会報で調べてみると、この年を皮切りに8期と9期一緒のOB山行が毎年続くことになったようだ。途中1回休んで今年で11回目という。

仕事のことやら家族のこと、体のことなどいろいろあって不義理を重ねてきたが、今回は中里さんが勤めるホテル松島大観荘泊まりとあっては、地元仙台にいる同期の一人として、やはり行かねばなるまい。それに、目的地の桑沼のことは何も知らないが、どうやら山登りははしなくていいようだ。山登りがなければ、登山靴をはるか昔に処分してしまった私でも大丈夫だろう。

大観荘に集合したのは9月6日(日曜)の夕方。JR利用の電車組は三々五々集まり、車組は途中で合流して皆で松島湾内島巡りや瑞巖寺見学などをしてからホテル入りした。

TUWV創設50周年記念行事で顔を合わせた仲間が大半だが、やはり懐かしさが先に立つ。濱君とは安達太良山以来だろうか。元気な様子の濱君に会えてうれしい。川田君とは卒業後初めてのはず。顔を合わせても誰か分からず失礼しました。

夫婦一緒の参加が多いことにも驚く。うらやましい。家族そろって健康で、仲良くなければ、この年になって夫婦での1泊旅行などできない。もっとも、本心のほどは分からないが。それにしても女性陣の元気のいいこと。

われわれの部屋は、島々を見下ろす山の中腹に位置する大観荘の5階の4部屋。いずれも海側の「オーシャンビュー」で、部屋の中から松島の海を照らす月を鑑賞し、空を赤く染めていく日の出を拝むという、かつてのワングル生活からは考えられないぜいたくぶり。

素晴らしい部屋を用意してくれた上に、夜の宴会ではビールの差し入れ、桑沼ではガイド役と、中里さんにはすっかりお世話になった。だからほめるわけではないけれど、元気いっぱいでも本当にいいお嬢さんですね。

翌7日(月)も上天気。電車組は車組に分乗し、車列を組んでいざ、桑沼へ。桑沼は北泉ヶ岳の北方約1.5キロにあり、北泉ヶ岳の登山口になっているというが、そんな沼があるなんて知らなかった。

泉ヶ岳のすそ野を回り込むように伸びる林道を走り抜け、沼のそばの駐車場に到着すると、椅子に腰かけていた管理人のおじさんが愛想よく迎えてくれた。と思ったら、松島をパスして桑沼に直行していた守護君だった。

桑沼は、こんもり繁った広葉樹に覆われた静かな沼だ。隠れた紅葉の名所というのもうなずける。水の中を覗くとメダカのような小魚がいっぱい泳いでいる。かっぱえびせんのくずを投げてやると夢中で食べる。

腹ごなしに皆で沼の周囲のブナ林を散策した後、水辺の空き地で昼食。途中のコンビニで調達したカップ焼きそばやカップうどん、おにぎり、さらに、果物、菓子、コーヒーと、次々出てくる。川田君は一升瓶を抱えて幸せそう。のんびりとした時間が流れる。

久しぶりだったけど、参加してよかった。忘れていたさまざまな思いが呼びさまされ、気持ちが新たになった感じだ。幹事役の伊藤夫妻に感謝です。来年の山行は姥湯の予定とか。また会いましょう。



20期～22期 夏合宿（森吉山）、秋合宿（剣岳）報告

22期（昭和58年卒）石川 勤

第1回プレ 4/11（土）高尾山

清滝駅→高尾山→陣馬山→市道山→臼杵山→荷田子（瀬音の湯）

約25キロのロングコース。南極観測隊に行くことになった土屋教授の「トレーニングで長い距離を歩きたい」希望を叶えるため計画。8:30集合 9時から歩き始めて17時30分着。

メンバー 21期 富士原康浩 石井篤 千田敏之 22期 手塚和彦 土屋範芳

26期 伊田浩之 北村健太郎 ゲスト 川口達也（千田の同僚。東北大（理）80卒）

第2回プレ 6/7（日）奥多摩シダクラ沢

惣岳バス停→シダクラ沢→C1128→御前山→境橋バス停

メンバー 21期 石井篤 千田敏之 22期 手塚和彦 石川勤

第3回プレ 6/20, 21 谷川岳

1日目：土樽駅→茂倉新道入口→矢場ノ頭→川棚ノ頭→茂倉岳避難小屋（泊）

2日目：避難小屋→茂倉岳→一の倉岳→オキの耳→トマの耳→天神平→土合

メンバー 21期 千田敏之 22期 石川勤

第4回プレ 7/18, 19 立山（本当は剣岳のはずだったが悪天候のため）

1日目：富山駅→室堂→剣沢（テント泊）

2日目：剣沢→別山→立山→室堂

メンバー 21期 富士原康浩 22期 石川勤

夏合宿 8/7(金)～8/10(月)

1日目：あにマタギ駅→森吉山→避難小屋

2日目：避難小屋→森吉山→ヒバクラ岳→割沢森→クマゲラ保護センター（泊）

3日目：クマゲラセンター→桃洞滝→トウド沢赤水沢源頭→兎滝→赤水峠→玉川温泉（泊）

メンバー 20期：岩屋淳 21期：富士原康浩 石井篤 千田敏之 22期：手塚和彦 石川勤

秋田内陸縦貫鉄道あにマタギ駅に12時着。森吉山までの道はあまり踏まれていない様子。思ったより時間がかかる。夕方ピーク近くで熊に遭う。笛を吹きまくる。避難小屋は快適。

2日目は森吉山からヒバクラ岳を過ぎるあたりまでは良い道で日光キスゲが咲いて広々しているが、割沢森付近はかなり藪に近い箇所もある。一同不機嫌になる。全く人には会わない。昼過ぎより雨になりクマゲラ保護センター（無人）で雨宿り。たまたま来ていた慶応のワングルがセンターに泊まるとの事で、我々も泊まる事にした。夕方巡回の人が来たが黙認してもらう。学生には申し訳ないが夜酒を飲む。

3日目は気持ちの良い沢歩きで、登りの桃洞沢、下りの赤水沢ともに信じがたいことにずっとナメになっていてゴーロ歩きは皆無であった。独特の形をした桃洞滝手前から入谷。高度感のある男滝を慎重に登りナメを歩き続け、細くなって水が切れると分水嶺となる。赤水沢へ下り始めるとすぐに

ナメとなる。沢を忠実に詰めれば藪は無い。ウサギ滝はザイルを出して懸垂下降した。そこからしばらくすると赤水峠に行く沢との分岐に出る。ザックをデポした桃洞沢出合いに戻る。この間もずっとナメである。沢中で素麺を食べていると雨になる。毎日午後になると雨が降る。



赤水沢から赤水峠への道は、国土地理院の地図では道になっているが実はナメ沢である。沢を上り詰めると道に出る。ここから玉川温泉までは1.5時間の林道歩き。途中森吉山登山口の標識があるが、この標識から入山すると迷うであろう。そういえば「遭難します。注意しましょう」の標識が赤水峠にあった。

玉川温泉で一泊して翌日帰る。盛岡で焼肉、冷麺で反省会。



秋合宿 9/19(土)～21(月)

1日目：富山→室堂→剣沢(テント泊)

2日目：剣沢より剣岳ピストン

3日目：剣沢→別山→内蔵助平→黒4ダム→大町

メンバー 21期：富士原康浩 石井篤 千田敏之 22期：手塚和彦 石川勤

剣岳・点の記という映画が話題になり、ブームに流されやすい我々メンバーも今年は剣に行くかという機運となっていた。前日の夜行急行能登で朝富山着。地鉄、ケーブル、バスを乗り継ぎ室堂へ。途切れることのない集団の中で雷鳥沢を登り剣沢に下る。テン場は200張り以上の大賑わい。早い時間から酒を飲んでダラダラする。

翌日は早起きして剣ピストン。(本来の計画ではこの日は剣のあと真砂沢まで剣沢を下り、さらに翌日池の平、仙人池をピストンし内蔵助平から黒4まで行く予定であったが、いつものことではあるが飲みながら計画を縮小した。)頂上直下のカニの縦這いで渋滞。天気は3日間とおして雲ひとつない快晴。ピークでのんびり景色を眺め下山。30分ぐらい後ろを歩いていた人がカニの横這いで転落して亡くなったらしい。この日も昼過ぎにはテン場に戻り昼寝。夜酒を飲む。21期の3名は更に計画を縮小し、内蔵助平には行かず室堂から下山を決意。(もともと行く気はなかった。靴ずれで歩けない。など理由々々)



3日目、別山の登りでパーティを分ける。手塚、石川は内蔵助平に向かう。小屋で道の状態を聞くと、崩壊している箇所注意到。熊に気をつける事の2点を言われた。急で歩きにくい下り。内蔵助平は広々した草原を想像していたが、身を没するような草であった。夏に熊に会った事、千田氏が奥多摩で熊に遭った事を思い出し、笛を吹きながら下る。内蔵助谷出合いで無人の緑のテントを見た。前日の夜下山途中で転落死した人の物であろう。長い急な下りで黒4についた時には疲れきってしまった。年々体力が落ちているようだ。来年はどこに行けるやら。

最後に森吉の美しい森の写真を。



富士0X—3776m完全登山

43期(平成16年卒)山下 絢子

遡ること約一年。登山仲間の「海から富士山を目指す」という山行報告を目にしました。富士山なんか登る山じゃない（眺めるもの！）。と前々から思っていたのですがこんな企画なら富士山もアリ。と。0B同志を募り、いざ決行、富士0X（フジゼロックス）！構想一年、実行たったの二日間、3776mアップ、2976mダウンの日本で一番の高低差山行です。

三連休初日、自分を含め計5人のメンバーが静岡県富士市に集結。金谷&村上（43期）、吉村（44期）、雨宮（45期）、北は日光、南は大分からとこんなバカ企画によくもまあ集まってくれました。

決戦（？）の朝、富士市内のホテルからタクシーで夜明け前の田子の浦へ。スタートはここ、海拔0メートル。打ち寄せる波打ち際で出発写真。いざ出発！田子の浦から登山口まで約25キロ、1000メートルアップ。工場地帯、住宅街、林道とアスファルトの道をひたすら前に進みます。25キロを5時間と見積もっているため、そうのんびりもしてられません。下界歩きだと思って、甘く見ていましたが実際は上り坂が続きます。二五万図を頼りに進むも、住宅街の地図読みは難しい。金谷君のGPSでなんとか難所を乗り切りました。しかし、張り切っていたメンバーの生気も、徐々にアスファルトに吸収され…

…なんとか一合目に着くものの、体調不良のため、吉村君がリタイア（バスで下山）。吉村君の分まで頑張るぞ！と気合を入れ直して、須山口登山道に突入。一合目ながらこの登山道には人影も殆どなし。でも、登山道はよく整備されていて快適。一気に高度を稼ぎ、森林限界へ。ようやく視界が開けた！と思いきや、私たちを待っていたのは激しい風。この週末は各地で山は大荒れになりましたが、富士山も例外ではありませんでした。宝永山の山姿を横目に、急勾配のザレ場を吹き飛ばされないように踏ん張りながらようやく富士宮登山口六合目に到着。ここから一気に人が増え、観光地化。予定通り日暮れ前に初日の新七合目「御来光山荘」に到着。幸運にも、小屋から2本の虹と影富士を拝むことができました。

翌日、といっても0時半に小屋を出発。頭上には満点の星空、そして眼下にはまばゆい夜景が！しかし寒い！ヘッドランプを灯して頂上を目指します。空気はどんどん薄くなり、深呼吸しながらゆっくり足を進めます。頂上付近では渋滞にはまるものの、なんとか頂上に到達！！ついに3776mを自分の足で登りつめました。4人にとって自力で登った人生最高峰！大勢の登山者と一緒に、太陽を迎えました。眼下には自分たちが歩んできた道のりがくっきりと照らされます。あの海岸から来たなんて…。日本最高峰の碑の前で、記念撮影。金谷君は田子の浦で汲んできた海水を石碑に。

村上君は海パン姿で記念撮影・・・の予定でしたが、これは自重。しばし、日本最高峰を堪能し、いざ下山。我らのゴールは標高800メートルの浅間神社。富士山をよいしょ、とまたいで今度は南側に下山です。五合目までは、半ば観光地のような雰囲気でしたがそこから下の登山道はさっきまでの喧騒がうそのような静かで爽やかな山道。14時前にゴールである麓の富士浅間神社に到着。わずか1泊2日とは思えないこの達成感。田子の浦をスタートしたのがはるか昔のように思えてなりません。まだ富士山に登られていない方、一度登ってうんざりした方、時間はとれないけど達成感を味わいたい方、こんな山行はいかがでしょうか。



日本最後の秘境『雲ノ平』秋合宿

44期（平成17年卒）吉村 雄祐

日時：2009年09月19日（土）～23日（水）4泊5日

行程：新穂高温泉～双六岳～水晶岳～雲ノ平～太郎平～折立

メンバー：中川俊雄(41期)、佐藤出(44期)、佐藤実里、山上基樹(44期)、吉村雄祐(44期)

新宿発の高速バスで新穂高温泉に向かった4人は、途中で乗り換えたバスで山ちゃんに遭遇。みのりさんは、山ちゃんに初接触。ゆるい二人のやり取りが微笑ましい。ワサビ平の小屋までは林道ぼくぼく。唯一の豪華エッセン(?)おでんに舌鼓。

2日目、快晴。双六小屋まで6時間の登り。初の長期山行のみのりさんも元気そう。途中の鏡平の池には槍ヶ岳が映り、そこで写真を一枚。シルバーウィーク最高！と。双六小屋では、なんと生ビールが。生ですよ！生！奥さん。（北アなら当たり前？）「山小屋で買い物するなんて考えられない」という教育を受けてきた佐藤&吉村。でも700円でそんな高くなくね？俺らもう社会人だしと、他の人に隠れて喉を潤す。そこへみのりさん登場。もちろん共犯者に誘い込む。Dは乾物の何か。ちなみに、この日から乾物地獄が続き、たも先生のご機嫌も最高潮な訳だが、思い出してもアレなのでこれ以上はスルー。

3日目、快晴。寒いのと高山病で、夜しっかり休めないメンバー達。特に、佐藤と山ちゃんはかなり頭が痛いらしい。まずは、双六岳まで1時間の登り。すでに双六巻こうよと弱気の山ちゃん（笑）。しかし、今回のルートは山らしき山が双六と三俣蓮華くらい。というのも、みのりさんの体力を心配した『愛妻家』の佐藤ゴン太君は、行動時間が長くなり過ぎないように企画を立てたのだ。（その精神を生涯忘れないように！）そんな中、双六ピークでエアリアを眺めながら、山ちゃんやたもさんが大変なことに気づく。鷺羽や水晶、行けんじゃね？行動時間は10時間近くなるが、16時くらいには天場に着く計算。マジやベー！ってことで、佐藤夫妻をあっさり切捨て、更には持てるだけ佐藤に共同装備を預け（鬼畜）いざ、水晶！！歩くペースも流石に3人だと速くなる。しかし、そこは3000m級。歩荷も軽いし余裕と思いきや、鷺羽の登りがヤバス。途中、山ちゃんは先行く二人に間を空けられ、休み休み歩くしかない状態。Topの吉村も、良いペースでは歩くが、息は絶え絶え。ゼーハーゼーハー。おまえはダースベーダーか？なんて本当にそんな状況。見るに見かねたたもさんは途中、一本でも取るかと。ドエス星の王子たもさんが、この時ばかりは仏に見えた吉村。なんとかピークに達し、山ちゃんを待ち、長めの一本。ここからも山ちゃんは回復することなく死にそうに歩く。途中の分岐で、ザックをデポし、サブザックでピークを目指す。水晶まであと30分ほどの水晶小屋、なんと山ちゃんはココまできて、「オレここで待ってるわぁ」と。流石に二人がかりで説得し、再出発。山ちゃんも、頭痛で頭が割れんばかり、身体が言うこと効かないという感じだが、なんとか意地で登頂。ただ、景色は最高。北アの真ん中辺りだから、槍から立山、鹿島槍と360度北アルプス。

しかし実は、水晶からの下り&祖父岳の登りが本当の正念場だったのだ。地図上で、たった、たった80mの登りが断崖絶壁のように見える。地図、間違ってるんじゃない、本気でそう思う。時刻も15時近くなり、体力的にも精神的にも、人生オワタ＼(^o^)/な感じの3人。それでも、死力を振り絞り80mの頂きを踏破。一本してると若い女の人に「ずん子さんのお知り合いですか？」と尋ねられる。彼女は絢子さんの知り合いで、吉村も去年の0B夏合宿のとき、剣山荘で会っていたのだ！これはもしや『運命』！？と勘違いした吉村は、必死に話を広げようと試みるも、「私、急いでます」オーラに瞬殺。天場までの下り、佐藤夫妻はテントで、Dの準備中かなと楽しみに向かうも、天場はテントだらけ。テント何処だよ？分かりますと、向こうから次第に似てきた感のある二人



がザックを担いで近づいてくる。おせー！！話を聞くと、みのりさんは佐藤と二人きりだと甘えんぼ（？）になるらしく、つまり激遅らしい。ははは。

4日目は、今回のメイン『雲ノ平』に相応しく、天気はガス、要カップ。あまりテンションの上がない4人に対し、佐藤ツアーガイドは庭園？を説明して廻る。しかし、この日も6時間弱の行程。一同、みのりさんは大丈夫か？内心訝しみながら歩くも、太郎平の天場まで元気に良いペース。5日目はバスの時刻もあるので、3時間の下りを瞬殺。バスを待っていると、同時期に立山に登っていた健史カップルが車でお出迎え。差し入れのラーメンに心暖まる一同。お疲れ様でした！

TUWV45期 同期山行開催！【2009年8月8日～8月9日】

45期（平成18年卒）佐藤 賢一

メンバー：45期 雨宮俊 草野駿一（欠席）佐藤賢一 多田忠義 長井千里 浜本洋 平田弘一郎

【開催にいたるまで】

近年のTUWVの中では比較的人数が多い45期（7人）・・・。TUWVを卒業して数年間、「同期山行をやりたい！」という声は上がれどなかなか実現できずに、気づけばみんな社会人となり、居場所もバラバラになっていた（図1）。去る2009年1月、個人的に開催した新年会場で、「今年こそは」と同期で誓い合い、開催に向けて、ゆっくりと始動した。

人数が多いことに加え、居場所はもちろん、職場の勤務形態もバラバラなメンツで、日程・行き先を調整するのはなかなか難しく、思い通りに企画が進まない時期もあって、若干の憤りと不安を感じたこともあったが、なんとか、「8月8～9日」という日取りで、おおよそみんなの居場所の中心にあたる「吾妻連峰にて開催」ということが決定。山行自体はとてもシンプルなもの、

1日目：集合→吾妻連峰周遊（一切経～鎌沼～東吾妻）→兔平キャンプ場で宴

2日目：温泉・打ち上げ・解散

ご覧の通り、日帰り山行と宴を催すという簡単なものではあるが、同期山行は集まることに意義がある・・・と思う。結局、直前で草野がメン欠となってしまう、6人での決行となった。

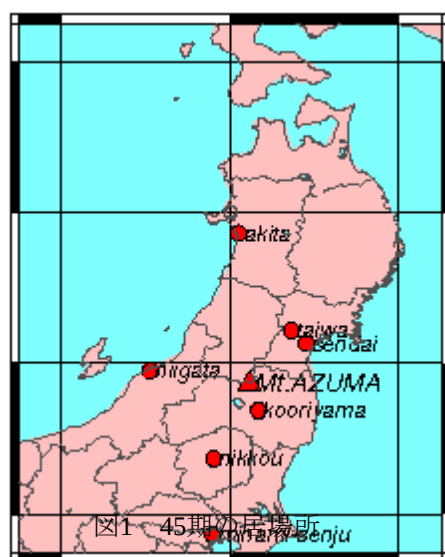
【8日（土）】曇り時々雨

集合を兔平キャンプ場10時とし、各人それぞれの交通手段で集合場所に向かう。といっても、長井を除いては全員車持ち、6人のところに車が5台という過去例を見ないアプローチとなった。途中、渋滞に巻き込まれた車もあり、宴のみ参加となる平田を除いて、全員が集まったのは11時前となってしまった。

当日は予想通り雨が降っており、浜本に至っては駐車場に着いて早々に「今日は登らないよね？」と言い出すローテンション。OBともなると、現役の頃にあった登山への使命感のようなものはすっかり薄れ、早々と今日の山行を中止する。

雨の中キャンプ場の手続きをして、とりあえず、余った時間の使い道を考える。自分を除く4人は最寄の吾妻小富士に登りにいった。自分は前日に野球の練習などもあり、ほぼ徹夜での福島入りとなったので、夜に備えて横になることを決意。

数時間経っても、まだ正午過ぎ・・・。年を経てアルコールへのストッパーが弱くなっていることもあり、「やっちゃいますか！？」の一言で、いるメンバーだけで真昼間から宴を開始する。肴として、急遽焼肉を開催することにし、食材と薪を遅れてくる平田に頼む。宴の話題は、各人の近況や最近の思う所などなど、いろいろあったが、やはり「一家の主」になる日が近い（と思われる）、彼に話題は集中した。そして、大量の肉とともに平田も合流し、いよいよ本番開始。数年経っても、同期で作



り出す場の雰囲気は全然変わらず、それぞれの持つ良いところは変わってないと感じた。

【9日（土）】雨時々曇り

この日も雨模様だったのだが、何もせずお酒だけ飲んで帰るのも気が引けるので、すっかり重くなった山への腰を上げ、鎌沼の周遊に出かける。足を負傷している平田は駐車場でのお留守番となり、山に行くのは5人。日帰り装備をしっかりとっていく奴もいれば、結構な登りがあるというのにサンダル履きで挑む奴もいて、ここでも各人の色が現れる。雨の中2時間ほどで周遊が終わり、いそいそと麓の温泉に向かう。6人で車5台というのは本当に不便。温泉は自分の高校時代の経験から、目処がついていたが、食事処となると5台駐車できるお店を探すのにも一苦勞。国道まで下り、とある大衆レストランにてささやかな打ち上げを開催し、「今度こそ全員参加の同期山行」を誓い合って、解散となった。



図2 鎌沼周遊へ出発



図3 鎌沼の畔にて

【終わりに】

元は8人いた45期も1年時の秋合宿後に1人が辞めてしまい、現在の7人となったわけだが、それでもここ10年では最も多い学年となる（7人以上となるのは第37期（8人）までさかのぼる）。決して、チームワークのいい学年ではなく、互いにフォローしあう一方で、足を引っ張り合った7人。そして、「沢やボートを復活させたい！」とOB・OGも含め数多くの先輩に協力してもらい、散々周囲の手を焼かせた7人。こうして、無事卒業し、同期山行と称して再び集うことができるのも最後まで活動を見守ってくれた数多くの先輩や、山中で支えてくれた後輩達のおかげだろう。

同期とのワンゲル生活は、決して笑顔だけの思い出ではないが、7人での押し合い圧し合いが、現在の身の振り方に大きく影響しているのと言うまでもない。それは、他のメンバーも同じだと思う。

今回、お世辞にも手際がいいとは言えない運営にも関わらず、快く参加してくれたことも含め、ずっと苦楽を共にし、自分を支えてくれた同期のみんなには本当に感謝です。また、集まりましょう！！

野生の着生ランを求めてヒマラヤ山地へ

3期（昭和39年卒）佐藤 敦

題名は格好良いが実際は以下に述べる事情があった。

今年で7回目のヒマラヤトレッキングは13日間のマナスル展望であった。登山ルートは登りと下りは異なるルートにしてあった。しかし、サーダーがこのトレッキングルートに慣れてない為か、下りのルートを間違えてしまい、道なき道を歩く事になってしまった。結果はランハンターの真似事が出来て、10種類のランを見つける事が出来た、それで題記のような大げさな題になった次第。

今年のメンバーは4名、3期生の私と松木功さん、4期生の及川捷悦さん、5期生の渋谷尚武さん。今まではタイ経由でネパールに入っていたが、今回はエヴェレスト展望フライトで人気を呼んでいる中国国際航空を利用、ヒマラヤ越えのフライトはこの会社の独占ルートらしい。成田から北京経由成

都へ、成都からラサ経由ヒマラヤ越えフライトでカトマンズへ、ここで14人乗りの小型機に乗り換えてポカラへ。

翌朝、サーダーがホテルへ迎えに来て、車で4時間のパレクサング村へ、この村がトレッキング開始地点となる。ここは標高700m、ここから標高差3300m歩く事になる。この村にシェルパ、コック、ポーターなどが集結していた。トレッキングの構成メンバーは、サーダー、シェルパ、コック、キッチンボーイ3名、ポーター6名、それに我々4名の総勢16名である。

バーラ・ポカリ・マナスル展望トレッキングはエヴェレスト街道、アンナプルナ、ランタンリルンなどに比べると、トレッカーが少なく、静かな山を楽しめると宣伝されているが、全くその通りで、全行程で会ったのは一つのパーティのみであった、それも日本人2人。しかしこのルートに入るにはエヴェレスト街道などと同じく一人につきエントリーフィー2000ルピー（約2600円）を支払わなければならない。このトレッキングルートにはログジが1軒もなく全てテントとなる。またこの地区では荷揚げ用のヤク、馬、等が調達出来ず、全てポーターに依頼せざるを得ない。

最高地点のテント場は3800mを予定していたが、水場が涸れており断念（水場とはいえ雨水の貯まった小さい池である）。バーラ・ポカリに2日間停滞、ここから展望のよい地点まで往復する事にした。このバーラ・ポカリからの「星空とマナスル」は最高だった。

ここに至るまで小さな村を何度か通過したが、トレッカーが少ないためか、村人がすれていなく、今まであちこちで子供からお金をせびられた事もあったが、このルートでは一度もなく、子供たちが野に咲く花を摘んで歓迎してくれた。過去6回のトレッキングでは経験がなかった事である。

前述のように下山は登りとは別のルートをとったが、サーダーが下る尾根を間違えたようだ、通常テント場には遅くとも3時頃には着いていたが、この日は薄暗くなり、5時を過ぎてしまった。途中、水場のない所でテントかと心細さを感じた程だった。



しかしルートを間違えたお陰で、ランハントが出来た、日本の山では高山植物を見つける為、当たり前だが下を向いて歩く、ヒマラヤでランを見つけるには上を向いて歩かなければならない、着生ランは頭上はるか上に咲いている、双眼鏡で探しながら歩く事もあった、首が痛くなるほどであった。我々の中の渋川ラン博士の指導の下いろいろな種類のランを見つけることが出来た、渋川博士でも正式な名前は分からず、デンドロビウム系、シンビジウム系としか判明出来なかった。

やっと村らしきものにたどり着く、その途中いつのまにかヒルに襲われ、及川さんは靴の中が血だらけになるまで吸い付かれた、なぜか及川さん渋川さんの二人が多くヒルに吸い付かれ、私と松木さんは被害がなかった、ヒルは若い血を見分ける能力があるのか、

彼ら二人は炭酸ガスを多く排出しているのか・・・しかしこれは蚊の話だった。村の名前をサーダーに聞いたら、「知らない」という。この名も知らない村の小学校の庭を借りてテント設営。子供達が珍しげに沢山寄ってきた。

この夜これ又今まで経験したことがない事件？が発生。いつもより遅い夕食を済ませ、就寝。一寝入りした頃9時頃か？突然若い女性4～5人の声、何を話しているか全然分からないが村人の女性が珍しい来客に会いに来たようだ、この村はサーダーが知らないというほどの小さな山奥の村である、見知らぬ客は珍しいのだろう、長い間サーダー、シェルパ、コックと話し合っている・・・もめ事では無い様子は察せられた。

私は植村直己の書いた本を思い出した、彼がヒマラヤ山地に行ったときか、或いは単独犬ぞり極地探検かは記憶にないが、名もしらぬ村に滞在すると夜な夜な村の若い女性が忍び込んで来る、これは近親交配による種の滅亡を避ける意味で医学的に重要な事で、他の種を導入する為だ・・・こんな趣旨の文だった。

話の内容が分からないための私の妄想ではあったがシェルパ達が拒否したら、同じネパール人の種より我が日本人の種がより遠いので遺伝学的に優れているのではと更に妄想を膨らましていた。実際この妄想通りになったら、果たして可能だったか？

今回は高山病に罹らなかったからなんとかあったか・・・彼女等は1時間ほどで帰ってしまった、やはり私の妄想だったか！翌朝サーダーに昨夜の騒ぎを聞いたら、寄付金のお願いらしかった、20000ルピー寄付させられたとの事であった。あとで考えたら、大きな声を出してで忍び込むものか？あり無いことだった。

トレッキング最後の夜はブルブレ町にテント設営、この町はマナンからのトレッカーの通り道なので通りは大混雑。16名全員でロキシー（密造酒）でお別れパーティ、ポーターの毎度の事ながら「レッサン・・・ピリリー・・・」の合唱でトレッキング終了。

山行きも弛んできました

4期（昭和40年卒）大東磐司こと小原佑一

今年を振り返ると、「山に行かなかったナァー！」「つつい、出かけるのがおっくうになって、・・・・

日頃は勝手気ままにのんびり独りで山に居るだけで満足している自分ですが、今回は縄文杉を見たいという中学高校時代の仲間に誘われて5月の連休が終った梅雨の初めに行ってきました。

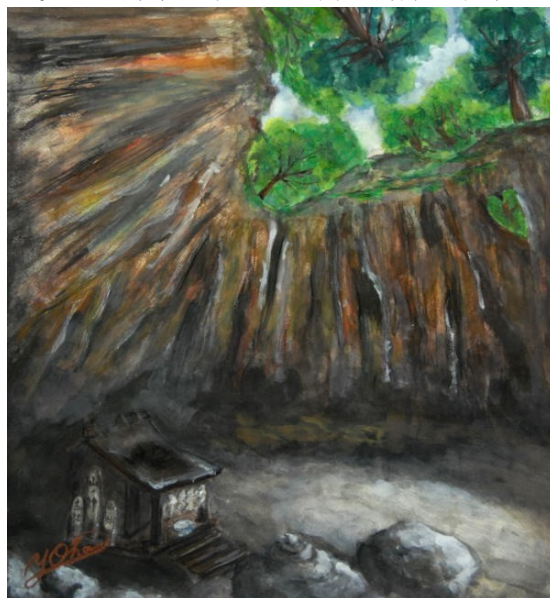
まず驚いたこと。ほとんどがガイドとおぼしき人に追い立てられて、ただ黙々と歩くグループ。現役時代の訓練合宿を思い出してしまいました。原生林を楽しむというより、何とか早く目的の縄文杉を見るためだけに歩く。今年、北海道で起きたガイド付きバック登山の遭難事故、何となく分かるような気になってしまいました。

山から下りれば温泉とお酒。潮がひいているときにだけ現れる海中温泉が屋久島の海岸の岩場にあり、潮が満ちてくるとき入っていたらどんなか気になって、わざわざ早起きして行ってきました。海岸の岩場に作られたいくつかの湯船（岩で囲ったくぼみ）にだんだんと海水が流れ込んできて、浸かっていると上の方から冷たくなってきます。冷たくなると隣の湯船に移動・・・・・・・・

島で名の知れた酒と言え、芋焼酎の「三岳」、現地でもなかなか手に入らないようですが、たまたま泊まった民宿経由で入手し、旅行中毎晩一升瓶を囲んで・・・・

帰ってきてからはこの民宿経由でお取り寄せ。一升瓶が1ケースどかんと届けられるので家族はあきれっていますが、値段はこちらの酒屋の半分、得した気分です。

夜になると、部屋にこもって飲みながら絵を描いています。



K2・バルトロ氷河 トレッキング

5期（昭和41年卒）八木 眞介

これは、去年のトレッキングの報告です。このトレッキングは、成田からイスラマバードへの飛行機が大幅に遅れたうえ、貨物室の故障で荷物を乗せられないといつてもないハプニングで始まった。その荷物は次の3日後の便で運ぶとのことで、成田のカウナタ前で急遽スーツケースを開け、寝袋等のとりあえぬトレッキングに必要なものを手荷物として持ち込む羽目になった。

イスラマバードから基地となるスカルドへは8000m峰ナンガパルバットを見ながらの飛行、そこからトレッキング開始地点のアスコーレには小型ジープで移動した。このアスコーレへの道は険しい断崖絶壁に作られた小型ジープがやっと通れるような非常に荒れた狭い道で、怖かった。

トレッキングは、行きが休養日1日を含めて8日、そのうちバルトロ氷河上に4日、目的地コンコルディアで1日滞在、帰りは全5日という日程のトレッキングであった。1日の行動時間は、ネパールのトレッキングと比べて全体に長めである。

氷河上に行くまでの道はきわめて乾燥しており、砂塵で景色がもやがかかったようになり、テントの中が砂だらけになるという状態であった。氷河末端の手前で1日休養（ポーターの為の休養とのこと）後、バルトロ氷河に入る。バルトロ氷河は表面が岩や土で覆われていて白い表面ではないということは聞いていたが、想像と違って無数の50mを越えると思われる小山が氷河の表面を覆い尽くしており、荒れた景観を見せていた。その中に大きな陥没の池、融けた水の流れる川、クレパス等が点在する。上流部では氷河上にセラック（氷塔）が現れ、様々な見ごたえのある景観を作っていた。

氷河の両側の手前の山々には、塔状の岩峰や尖峰が多い。特に氷河の右岸には、見事に天空に突き出たトランゴタワー、大聖堂の名を持つカシードラル、7284mのムスターグタワー等々の岩峰群が続き、特異な景観を作っている。左岸は、マッシャーブルム（7821m）がひととき大きくそびえ、さらに雪の壁や尖峰の奥に氷河を抱いた白い峰々が次々と現れてくる。

氷河の正面はガッシャーブルムで、8000m峰であるⅠ峰とⅡ峰は、それぞれⅤ峰とⅣ峰の陰に隠れて、かなり離れた特定の場所からしか見えないが、Ⅳ峰、Ⅴ峰、Ⅵ峰はずっと見えている。氷河上を進むにつれて、セラックの数も増え、様々な形で面白い。目的地のコンコルディアに近づくと、まずガッシャーブルムの左に8051mのブロードピークが姿を現し、さらに進むとお目当ての世界第二位の高峰K2（8611m）、右にはバルトロカンリ（7274m）、白い大きな壁を見せるコンダスピーク（6756m）等の山々が一気に展開し、まさに感激の瞬間であった。

コンコルディアは、標高4650mで、北と南からの2つの大きな氷河が合流して西への流れに変わる地点である。その入口の両側にマーブルピークとミートルと言う2つの尖峰が門のように立ち、歩いてきた正面にガッシャーブルム山群、左（北）に2つの8000m峰K2とブロードピークが並び、右（南）にバルトロカンリ、コンダスピーク、ビネピークが並ぶ。来た方向の下流の峰々を含めて、360°の極めてスケールの大きい、素晴らし景観の場所である。到着した日とその翌日の滞在日は好天に恵まれ、この景観を存分に楽しむことが出来た。ここまでの行程は決して楽ではなかったが、その苦労がすべて報われた思いであった。ただ、コンコルディアでの夜は約-10°以下に気温が下がり、-15°まで可という表記の寝袋で、持っていったものすべてを着込んで寝ても、寒くてよく眠れなかった。下の方では暑くて苦労したのと比較して、その差は想定を越えたもので、自然の厳しさをあらためて感じた次第であった。

雨・雪の日も多かったが、トレッキングは順調に終わり、回り道をして風の谷のナウシカのイメージが生まれたといわれるフンザを経由して、イスラマバードに戻った。ところが、帰りの飛行機に乗る前に夕食を食べたマリOTTホテルが1週間後に爆弾テロにあったというニュースを見た時は、自分がどんな所に行っていたかを、改めて考えさせられた。



トランゴタワー



マッシャーブルム



K2

アンデス・ブランカ山群 トレッキング

5期（昭和41年卒）八木 真介

今年は、花がきれいな季節だという5月から6月にかけて、アンデス・ブランカ山群のトレッキングに出かけた。ブランカ山群は長大なアンデス山脈の北寄りに位置し、ペルーの最高峰であるワスラカン（6768m）を持つ山群である。トレッキングのベースとなる都市ワラスは、ペルーの首都リマから北へ車でまる1日走ったところにある。途中までは海岸線を走るが、熱帯の緯度に位置するにもかかわらず、海流の関係であまり暑さを感じない。そのかわり、ほぼ毎日霧がかかっているとのことである。

ブランカ山群は、ヒマラヤ等にと比べると、ワラス等の都市がある谷から主稜線までの距離が短く、徒歩2～3日で峠に到達できる。また、車で峠越えできる場所も多い。ワラスに着いた翌日は、マイクロバスで約5000mの峠まで行き、そこで高度順応の時間を過ごした後、4000m付近で2時間程度のハイキングを行った。2日目は別の谷にマイクロバスで入り、4000m付近にテントを張り、付近を同じようにハイキングで過ごした。3日目からがウニオン峠（4750m）越えの本格的なトレッキングである。早朝、車で峠を越え、アマゾン側の最奥の集落から歩き始めた。行程は、トレッキング開始から2日目にウニオン峠を越え、さらに2日でワラス側の集落に着いた。このウニオン峠越えの道は、いわゆるインカ道をほぼそのまま辿る道で、上部の石段・石畳は昔のまま残っているとのこと、歩きやすい道である。

この山群一帯は、どの谷も3700mから4000m付近に広いU字谷を形成し、そこから急な狭い谷となって、人の住む地域に下っている。この広い谷はほとんどが草原であり、非常に気持ちの良いトレッキングが出来る。主稜線及び谷の両側には6000m級及び5000m級の雪山が連なり、そのコントラストが楽しい。花は、いろいろな花を見ることが出来た。日本には類似のものが無いと思われるような花が多く、新鮮な印象であった。特に、数が非常に少ないというリマリマという花を峠の直下で見られたのは、すばらしかった。

アンデスは往復の日数が多いのが難点であるが、ヒマラヤやアルプスとは一味違った雰囲気が味わえる。今回は特に問題なくトレッキングを終えて帰国出来ると思っていたら、乗換えのヒューストン空港での指紋の検査でひっかかり、30分くらい別室に連れていかれるというアクシデントが最後に待っていた。



ワスラカン（6768m）



アルパマヨ（5947m）



リマリマ

日光白根山を訪ねて

6期（昭和42年卒）加藤 邦明

8月25日の7時50分に最寄りのホテルを出発して、安楽なコース設定で丸沼ロープウェイ駅に8時29分に到着した。ロープウェイには、登山客が結構並んでいた。血の池地獄への分岐、小学生の子供達の集団登山とその取材のテレビ新潟がいた。七色平への分岐（9時35分：曇り）。東京から来たとの子供たち約50人と相前後しながら樹林帯を抜けて吹きっさらしの開けた所に出た（10時30分）。寒風の中でガレ場を登ったが、流石に途中の岩影でヤッケを着衣した（10時50分）。白根山神社に10時54分に

到着した。神社脇にはお社を修理している大工さんと登山の子供たちがいた。少し下がって、向かいに見える急な登りを上がれば白根山の山頂であった(11時00分)。証拠の写真を撮って、山頂の寒暖計では8℃と寒いのと霧の中なので神社まで戻った(11時15分)。大工さんと雑談しながら昼食を済ませた(11時30分)。



時間的にゆとりがあったので、五色沼経由で下山することにした。緩やかな草地を巡ると晴れて、後方に山頂が見えてきた。紫色のトリカブトが脇に咲く結構急なザラザラ岩碎の足元を下ると、避難小屋に到着した(12時23分)。先人が指さす方を見れば、鹿が3頭葉っぱを食んでいた。鹿を身近で見えるのは、2007年に行ったカナダのカナナスキスでの朝の散歩以来であった。五色沼に到着した(12時35分)。木陰で少し休んでから周遊道路を行くと、シラネアオイの看板があった。学生時代を思い出しながらガンコウランの実を食して、お帰りとした。峠に13時17分、阿弥陀ヶ池、次の峠に13時30分に着いた(曇り/晴れ)。そのまま急坂コースを下った。六地藏の分岐、七色平に14時00分、ロープウェイ山頂駅に14時25分に到着した。休息を入れて5時間半の高齢者向けコースであった。丸沼高原駅で足元を履き替えて車に乗り、ホテルに戻って、直ぐに、温泉風呂で汗を流した。

谷川岳幽ノ沢・中央壁左方ルンゼ登攀

8期(昭和44年卒) 佐藤 拓哉

すっかり色づいた紅葉の中、連日の晴天ですっかり乾き切った幽ノ沢のカールボーデンをゆっくり中央壁に向かって登っていった。カールボーデンは、大昔、氷河に削られた暖傾斜の広いスラブ状の岩場であり、気持ちのいいところであり、幽ノ沢の魅力の一つである。

紅葉で賑わう一の倉沢とは異なり、今日も幽ノ沢にはわれわれの他には3パーティしか入っておらず、まったく静かである。周りの雄大な岩壁の景観を楽しみながら、カールボーデンをT1と呼ばれるテラスまで登る。徐々に傾斜が増してくるので、適当なところ

ろでロープを出し、アンザイレンした。ここは広いスラブなので、どこでも好きなところを登ることができる。

T1から中央壁の基部を1ピッチと少しトラバース気味に左上すると、今日の目的である左方ルンゼの入り口となる。いつも濡れていて滑る左方ルンゼも、このところの晴天続きで、すっかり乾いており、快適なクライミングを予感させた。

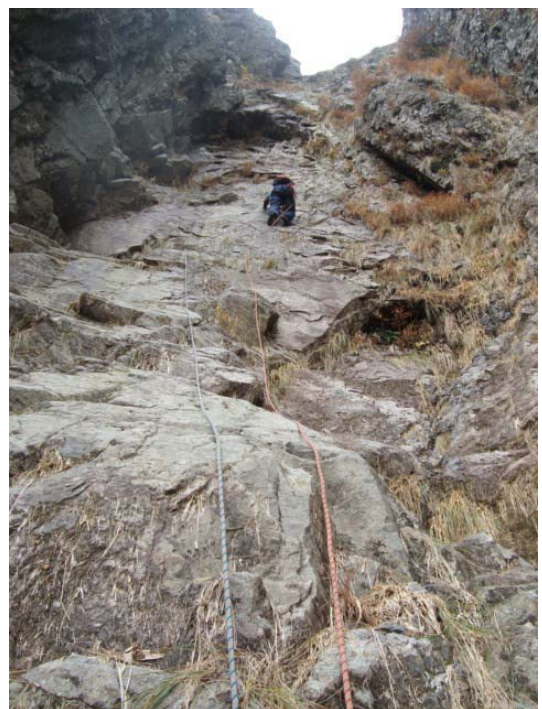
ルンゼに入ってすぐ核心部である。ビレイ点から見上げると、傾斜のきつい、ツルツルのフェース



が15mほど続き、その上にハングが覆いかぶさっている。逆層気味なので、濡れていると手強そうであるが、幸い今日は岩が乾いているので登りやすい。最初のうちは左寄りに登ると、水平フレーク状のツルツルの岩がある。フレークに古いハーケンが1本あるが、フレークの上もホールドが乏しいので、ハーケンを1本打ち足した。フレークの上にもう1枚、少し小さめのフレークがあるが、こっちは完全に浮いており、剥がれそうである。早めに右側に寄り、リッジ状に乗り移った。スタンスが外傾気味であり、おまけに草が多いので、濡れている時はあまり登りたくないところである。記録ではアブミを使っているものが多いが、完全フリーで登った。



その次のピッチもホールドの細かい、滑りやすいスラブで、核心部の続きという感じであった。ハーケンはあまりないので、支点から左上したところで取りあえず1本打った。そこから、途中ハーケンをもう1本打って直上した。



途中で終わりとして懸垂下降で下るか、上に抜けるか決めていなかったが、面白そうな岩場が続いたので、結局コルまで抜けた。カールボーデンの途中から、トータル10ピッチの長い登攀であった。一の倉沢の多くのルートはよく登られているのでハーケンがよく打たれており、ルートも分かりやすいが、幽ノ沢はハーケンが少なく、自分でルートを決め、ハーケンを打ちながらの登攀が続くので、総合的に難しくなり、アルパインクライミングの原点のような面白味がある。

コルからは、灌木と熊笹の斜面を中央壁の頭まで登り、さらに熊笹の中の踏み跡を辿ると堅炭尾根の登山道に出た。土合からのアプローチに2時間20分、コルまでの登攀に5時間20分、コルから土合まで4時間20分、トータル12時間のハードなクライミングであった（10月24日）。

ジャンダルムを縦走して

10期（昭和46年卒）田中 康則

最近よく登山をするようになった。北アルプスを中心だが、丹沢、奥多摩、高尾山などにも頻繁に行っている。北アルプスの経験で言えば、白馬を除いて全て松本から上高地が出発地である。4年前は槍ヶ岳から雲の平へ、更に竹村新道から湯俣温泉へ。3年前は白馬尻から大雪溪を登り白馬へ、鍾温泉から下山。昨年は涸沢ヒュッテから北穂高へ、大キレットを通り南岳小屋へ、天狗が原から上高地に下山。秋に再び涸沢ヒュッテへ。そして本年はジャンダルム縦走に挑戦した。

奥穂高岳からジャンダルム、天狗岳、間ノ岳、西穂高岳と縦走するコースには、ガラ場、ナイフリッジ、逆層スラブ、そしてクライミングチックな箇所が数知れず存在する。そんなコースだが、ヘル

メット、ロープ、ハーネスなどロッククライミング用装備無しでも縦走できる。もちろん、これらを持った完全装備の人も多い。ここは一般縦走コースとしては北アルプスだけでなく、日本で一番厳しいコースなのです。ある本には「技術、判断力、総合的体力、経験など全てに優れ出た人が、天候に恵まれた時のみ成功する」とまで書かれている。実際経験してみて本当に厳しいコースであった。

8月11日、午後1時新宿発の特急あずさで松本へ。電車、バスを利用し上高地へ。1日目は西穂山荘に宿泊。ビールを飲みながら夕食。ゆっくり温泉に入り、早めに寝ることにした。

8月12日、天気はまずまず。涸沢ヒュッテに向かう。ここでラーメンを食べ、いよいよ穂高岳山荘へ。ザイテングラードなど急な斜面を抜けると程なく山荘が現れる。この日もビールを飲みながら夕食を食べ、雑誌などを読み就寝。

8月13日、この日は雨。停滞日とした。雑誌やビデオを見ながら過ごす。北アルプス大縦走を撮影中のNHKのスタッフも同日停滞日。田部井淳子さんは周囲の人とお話をしていて。夜の天気予報で明日は快晴と報じられ、歓声がもれる。いよいよ明日と思い就寝。

8月14日、朝食も食わず、午前5時に出発。外は風が強く寒いのでヤッケを着て奥穂高岳へ。山頂でヤッケを脱ぐ。すでにジャンダルムに向かっている人も何人かいる。緊張感をもって馬の背に取り付く。鎖は無く信州側、飛騨川ともに鋭く落ち込んでいる。最初は下りになるが、厳しい下りの為、後ろ向き三点確保で下りる。手でつかむ岩、足場となる岩が見つからないと滑落もあるので厳しい。この最大のナイフリッジを下り終わるとロバの耳だ。難所中の難所であるが、鎖があったので少しほっとした。

やがてジャンダルムの下にでた。信州側を、鎖もない急な壁を両手で岩をつかみ、慎重に足場を確保しながら、ジャンダルムを巻きながら登って南側に出た。はらはらどきどきの滑落の危険性の高いルートだった。

ジャンダルムを過ぎてから急な岩稜帯を約1時間近く下ると天狗の科尔である。科尔からは一転して登りの連像であった。岩稜の山は登りの方が、手でつかむ岩や足場となる岩が確認し易く、下りより楽である。両手、両足を使って高度を上げるとやがて天狗の頭をすぎ、天狗岳の頂上に着いた。ここは360度のパノラマが広がり、目指す西穂高岳の山頂には多くの人達をはっきりと確認できた。

天狗岳の頂上からは逆層スラブの下りであった。幸い鎖があったので、鎖に頼って下った。下り終わると間天の科尔である。ここから間ノ岳の登りになりますが結構浮石が多く注意が必要であった。最後の急な登りは鎖があったので鎖を利用して登った。間ノ岳の下りはガラ場であった。下りきると最後の山場である西穂高岳に向かった。長い鎖場を通過、ハイマツがせりあがった穏やかな道を進み西穂高岳の頂上にでた。これで今回の縦走の難所は終わりかと思ったが、独標まではアップダウンのある厳しい岩場だった。独標を過ぎるとやっとダラダラした下りになった。既に夕食も始まっている頃に西穂山荘に到着。厳しい一日だったと振り返った。

8月15日、一番遅い午前6時の朝食を食べ、出発。西穂高口を下り、ロープウェーを乗り継ぎ新穂高温泉へ。タクシーで沢渡に出て、温泉に入り一人ビールで乾杯。バスと電車を乗り継ぎ新宿へ。9月の連休には厳しかった夏の思い出を探りに西穂高岳に行ってみようと思いながら帰途に着いた。

9月の連休は都合で行けませんでした。10月10、11、12の連休には上高地からの往復として西穂高岳へ行ってきました。既に初冠雪もしており厳しいイメージもありましたが、紅葉の時期と重なっていた為か、西穂山荘も独標も超満員で、西穂高岳も多くの人で賑わっていた。

縦走してきた、間ノ岳、天狗岳、ジャンダルム、奥穂高岳がはっきりと見え、厳しかった夏が思い出された。限界の登山からは多くの教訓を得た。

- ① フリークライミング位練習しておいた方が良い。
- ② 荷物は出来るだけ軽くする。
- ③ 水場が無いので、水は多めに持つ。
- ④ 朝食を食わずに出ることが多いが、弁当は早めに食べる。
- ⑤ 岩稜の山ではストックは必要ないので、ストックを持たない登山をする。
- ⑥ 縦走は体力が必要なので、トレーニングはしっかりとやる。
- ⑦ 大キレットや西穂高岳往復などで岩稜の山に慣れておく。

2009年の山行を振り返って

45期（平成18年卒）佐藤 賢一

【2009年の山行目標】

個人的に今年は北アルプスの「常念岳」と戸隠連峰の「高妻山」に登ることを目標としていた。

「常念岳」は、高校時代に山岳部の顧問から「北アルプスNo.1の名峰」と薦められたものの、TUVV現役時代には登れずに終わっていた。「高妻山」は、昨秋の縦走好きの集いで行った「日光白根山」の打ち上げ中、お店にあった百名山の本でふと目に留まった山である。「高妻山」ときいて百名山と指摘できる人は部内でもそういないと思う。これが、「マイナーな百名山をハントする」という縦走好きの集いの目標と一致し、行くことを決意したのだった。結果、高妻山は参加者の予定が合わず、中止となってしまったが、その他に行った山も含め、近況報告を兼ねて今年の山行をごく簡単に紹介する。



135度くらいの展望（アルプスっぽい山容）

【常念に向けて】

ワングル1年生以来のアルプスになるのだが、ここ数年は年に1、2回程度しか山に登れず、体力に不安があったこと、もう1つの趣味である野球を張り切りすぎて、昨年から少し左足首を痛めていたこともあり、心身の調整も兼ねて、練習山行は頻繁に行なった。

GWには、いつもお世話になっている1つ上の吉村さんから「どこか行かない？」とありがたいお誘いがあり、行きたかった山の1つ「皇海山」に行くことができた。近年新たに整備された日帰りルートではなく、従来のやや上級者向けのルートをチョイス。修験道ならではのなかなか急峻な登山道に四苦八苦しながらも、2泊3日というリハビリにはちょっと激しい山行を無事終えることができた。

その後も、世界遺産が眼下に広がる「白神岳」、秋田の名峰「森吉山」「太平山系」、訓練合宿以外では行ったことがない「二口山塊」など、気の赴くまま山に出かけ、心身ともにリハビリに励んだ。



皇海山の頂上にて



森吉山への残雪道

【いざ常念へ】

数ヶ月前から一緒に行ってくれる仲間を募集し、4人の仲間が集ってくれた。学年も身分もバラバラであるため、3日間（8月29～31日）しか確保できず、常念岳をピストンするだけの山行になってしまったが、みんな久々のアルプスなため、割と賑やかだった。

当日は、どんよりとした空模様だったものの、比較的楽なルートだったこともあり、「小屋までは」あっという間に到着。しかし、そこからが正念場だった。普段なら、かなり高く遠くの山頂でも「登ってみると意外とすぐ」という認識だったのだが、常念に関しては「すぐそこなのに、まだ着かない…」と個人的には息も絶え絶えになりつつピークを目指し、小屋からの予定タイムを大幅にオー

パーしての登頂となった。ピークでは思っていたよりも好天に恵まれ、時折、太陽も顔を出し、360度の絶景とはいわないまでも、135度くらいは景色を拝むことができた。もし、晴れていたら槍～穂高の急峻な稜線や、蝶ヶ岳～常念～燕岳と続く「空中散歩」の稜線を拝むことができだろう。顧問が「北アNo.1」と絶賛していた理由もうなずける。

前夜祭で飲みすぎたのか、スタート直前に嘔吐、山行中はずっと頭痛に悩まされるという完全2日酔いで山行に臨んでしまったのが、かなり山に失礼だった気もするが、荷分けはもちろんのこと、一緒にいったメンバーに悟られることもなく完遂できたのは、「辛くてもがんばる」という現役時代の2次新の効果かもしれない。

【まとめと感謝】

本来、高妻山に行く予定だった「秋の縦走好きの集い」も昨年で5周年を迎え、今年が10周年に向けての第一歩だったのだが、今年は小休止。来年度は、自分と直接関わりのある後輩たちもいよいよ社会に飛び出すことになる。同じく新たなスタートとして、2010年に6度目の集いを開催するのもいいんじゃないか・・・ということで、一度出ししかかった企画だが、もう少しだけ胸中にしまっておこうと思う。最後にメンバー紹介も兼ねて、自分の企画に乗ってくれたみなさんに感謝いたします。

・皇海山 5月4日～6日（2泊3日）

44期：吉村雄祐 佐藤出 47期：鹿嶋寛文

・二口山塊 大東岳～南面白山～樋ノ沢 5月23日～24日（1泊2日）

45期：多田忠義 47期：蔵本明 森田ゆずか 部外：鈴木博子

・常念岳 8月29日～31日（1泊2日）

45期：多田忠義 47期：蔵本明 森田ゆずか 48期：宮地俊騎

・高妻山 10月31日～11月1日（結果行けなかったけど、参加表明サンクス！）

46期：曾我夏深 47期：蔵本明 森田ゆずか 48期：宮地俊騎（敬称略）

以上のみなさま、本当ありがとうございました。今年、一緒に行けた方も、ご無沙汰になっている方も、来年、ぜひ一緒に遊びに行きましょう！！



常念岳に登頂

近況報告

20期（昭和56年卒）の佐々木 晃（ささき農園）です

12月の初め、恒例の落ち葉集めをしました。今年はぐっと近場のつくばの県営公園で。今年もたくさんTUWV仲間の手助けをいただきました。今年の特記事項は、長年消息不明だった笠原さん（18期主将）がメンバーに加わったこと。毎月1回来園され、いまや欠かせない戦力になっていただいています。夏には奥さんを同行され、仲むつまじいツーショットは、見た者に衝撃を与えました。今まで機会がなかった方も、来年はどうぞお訪ねください。



22期（昭和58年卒）利根川 敏です

足掛け7年にわたる仙台勤務が今年の4月に終了し、5月より自宅のある町田市に戻りました。（勤務地は相模原です）私の仙台勤務では、東北大学の創立100周年とTUWVの創部50周年を、母校のある仙台でお祝いする事ができ、実に充実した生活になりました。

3人の子供達も、それぞれが見つけた夢に向かって歩み出し、家内ともゆっくり話をしたり、余裕をもって過ごす機会が少しずつ増えてきました。夏には能登半島、秋には紀伊半島と、ETCの付いた車にテントと寝袋を積み込み、夫婦の旅についてくる末っ子の3人で大旅行をしてきました。高速道路は大渋滞でしたが、テントに入り寝袋で体を休めると不思議と活力が湧いてくる... TUWVで身に付けた習慣・習性？は、30年たった今でも変わらないものだな、と改めて感じています。

最近では会社主催の健康キャンペーンで、「毎日2万歩以上、120日続けて歩く事」を目標に、年齢に合わせた運動で、登山のお誘いに対応できる様にしています。

TUWVの50周年では大変苦勞をしましたが、イベントに合わせ整備しました電子メールのネットワークで、400名以上の方々に近況をお伝えする事ができるようになりました。今後ともボケない限り電子メールのネットワークを整備していきます。メールアドレスの変更、新しい仲間のアドレス追加などありましたら、利根川宛にご一報下さい。これからも、よろしくお願いいたします。

〒194-0023 町田市旭町1-14-15 042-738-7301 携帯 090-1432-7806

（平成22年4月まで、旧住所（仙台市宮城野区）宛での郵便は、町田に転送されます）

電子メール GWT00287@biglobe.ne.jp 利根川 敏

訃報

今年3月5日、7期の斉藤洋三さんがご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

斉藤洋三さんを偲ぶ

7期（昭和43年卒）上田 俊朗

7期23名は卒業後40年間誰一人欠けることなく職場で活躍し、そろそろ第二の人生を謳歌する人も出てきた中、今年3月5日斉藤洋三君が亡くなりました。彼は卒業と同時に日本鋼管に就職。長く福山で勤務し、役員退任後自宅のある横浜に戻り、酒とタバコを楽しみながら奥様と悠々自適の生活を過ごしておりました。同期会にも参加し、元気な姿を見せていました。

今年の3月5日、珍しく娘、息子さんも交えた夕食をとり、くつろいだ後入浴。なかなか風呂から出てこない様子を見に行くと風呂の中でぐったりとなっていたそうです。死亡診断は心不全。葬儀がすんだ後でしたが5月10日に同期6人、23日に6人が自宅に弔問に行き慰めにもなりませんでした。が奥様と思い出話しをして参りました。

今年の同期会は乗鞍高原で行いましたが、参加者一同で洋三君の冥福をお祈りいたしました。

7期（昭和43年卒）金子 清敏

未だ洋三さんと飲んだ東京の飲み会、今年1月に新年会催促での彼の電話の声が未だ残っています。常温の酒を肴少なくして静かにグイグイ飲む姿は、往年のNKK福山野球部部長の凛々しい姿を現しておりました。然し、その役職も終わって横浜の自宅に戻り、一人散歩で何もしない（町内会の当番はあったものの）老人佳境に少々疲れが出たとこぼしておりました。何かしにやか・・・と。

体型からすれば丸々としていいはずの腕が老人の細さになっていたことと、晩年の自宅の酒がウィスキーに代わっていたことが、”おい金子、酒で害しても死ぬときはやってくるんだ。俺は酒をやめない。肝臓の数値なんて気にするな”と言ったことが、彼の訃報が伝えられたとき、真っ先に過ぎったのでした。心不全に至るまでに相当心労が溜まっていたことでしょう。

外に出て対話して英気を吸収し、脳と身体を活性化しましょう。

2009. 3. 20

TUWVOB各位

TUWVOB会
会長 小原佑一

会費徴収廃止のお知らせ

OB会活動にご協力いただき、お礼申し上げます。特に、昨年の50周年記念行事には、当初の予想を大きく上回る多くの方々にご参加いただき、大成功に終えることができたことにつきまして改めて御礼申し上げます。

記念行事の準備の過程において、今後のOB会費のあり方が議論に上がりました。行事終了後、検討を行い、毎年多くのOBが集まる新橋亭における新年会において、下記のとおり承認され、その後仙台の主だった方々（50周年行事の実行委員）の賛同が得られましたので、お知らせいたします。これまで会費を納入していただいた方々には深く感謝申し上げます。

記

1. 決定事項

- ① 会費の徴収を廃止する。
- ② 葬祭に関してはすべて同期の方々に一任し、OB会から香典、生花、弔電は出さない。
- ③ 将来、OB会運営のための費用を集める必要が生じた場合は、その時点で方法を検討する。

2. 決定の背景と理由

(1) 会費の推移

過去5年間の会費の推移を概略の金額で次頁の表に示す。表から分かるとおり、会費納入者は平均で14人と、約500人いる会としては極端に低い数字である。過去においては積極的に集め、また新年会参加者から徴収した時期もあった。しかし、支出から分かるとおり、必要経費が少ないため、最近は事務局が積極的に集めなくなったことにもよるものと思われる。

(2) 会費徴収廃止の理由

- ここ30年以上、経費が必要なOB会活動は会報の作成、配布だけであり、昨年の50周年行事を契機にメールによる配信可能者が大幅に増えたので、今後は必要経費が20,000円程度で済む。
- 逆に、将来は葬祭に関する経費が増加するようになるが、そのために会費を集めるのは会の趣旨にそぐわない。
- 葬祭の経費をなくせば、現在の保有金額及び50周年行事の残金（OB会費に繰り入れることになっている）だけで、向こう20年以上は運営可能である。
- 現役の遭難、海外遠征など緊急に多額の費用が必要な場合は別途対応する。
- これまでも会費納入者は年間14人程度（約2.8%）と極めて低く、実質的には会費と言えない。

年	会費収入(人)	支 出		
		合 計	会報印刷、郵送	香典、弔電、生花
2004	18,000 (7)	46,000	29,000	16,000
2005	78,000 (18)	29,000	28,000	0
2006	18,000 (18)	33,000	32,000	0
2007	40,000 (15)	103,000	29,000	72,000
2008	25,000 (11)	45,000	24,000	20,000
合 計	179,000 (69)	256,000	142,000	108,000
平 均	35,800 (14)	51,200	28,400	21,600
現在の保有金額		280,000		

新年会のお知らせ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2010年1月29日(金)18:30 (会費は10,000円の予定)

新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい)新館(TEL 03-3580-2211)で行います。

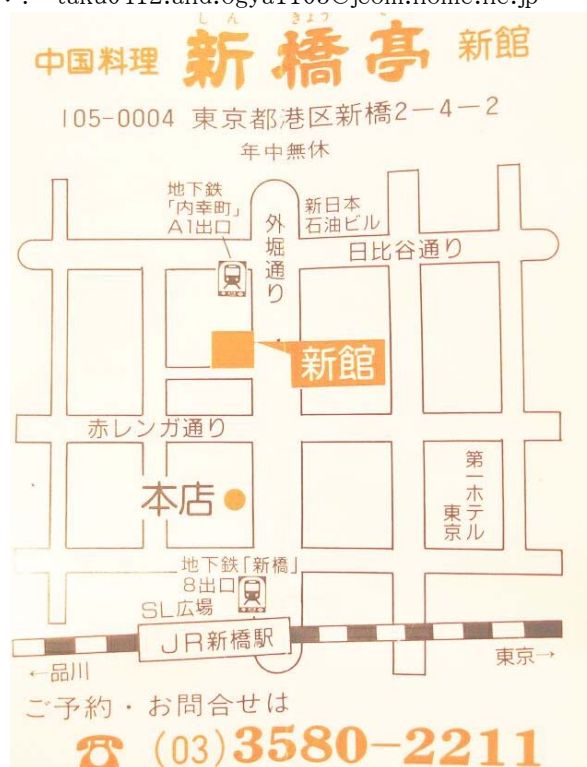
お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、出席ということになっているのに欠席される方も結構います。これは本当に幹事泣かせ。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogya1103@jcom.home.ne.jp

<2009年新年会出席者>

(S39)岡好宗、後藤龍男、佐藤敦、松木功
 (S40)及川?悦、小原佑一、島崎質、
 関川利男 (S41)相沢宏保、朝倉肇、桜洋一郎、
 渋谷尚武、八木真介、横山雄一郎、吉田公平
 (S42)新井武、加藤邦明、堤正尚、青木祐二
 (S43)石川誠之、大木芳正、大釜寛修、菊谷清、
 藤森英和、真尾征夫、村山貞一、上田俊郎、
 山口正雄 (S44)小笠原弘三、佐藤拓哉、
 鳥山研一、三原健治 (S45)富川正夫、原田博夫、
 桃谷尚安 (S46)薄木三生、菅原英行、田中康則、
 若佐則雄 (S47)池田重則、近田和人
 (S48)神山文範、松井一昭 (S49)岡部安水
 (S50)男沢弘 (S55)板橋正之

以上47名



★★ 事務局 より ★★

TUWVOB会 2008年会計報告

(東京口座)

1. 収 入	
前回から繰越	279,701
OB会費(10人)	16,000
利息	390
計	296,091
2. 支 出	
会報 印刷	7,056
送料	5,460
事務用品、通信他	484
次回繰越	283,091
計	296,091

☆ 会報 No.40 をお届けします。

会報も No.40 という節目を迎えることができました。今回は、若い方々が現在合宿形式(?)でみんなで山に行かれている様子や、とつくに還暦を過ぎたにもかかわらず、ヒマラヤやアンデスに行かれている方々の様子をお届けします。また、同期会も続いているようです。いつまでも“山”から離れられないわれわれでありたいものです。

☆ OB会費の徴収は廃止になりました。

3月にお知らせしたとおり、今年から会費の徴収は廃止になりました。これまで会費を納入していただいた方々には深く感謝申し上げます。